学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ
中京大学スポーツ
Beyond
Vol.33
2026 12月号

梅村学園オリンピアンズ・パラリンピアンズ&

アジア競技大会

出場者大集結!!

11月8日、梅村学園オリンピアンズ・パラリンピアンズの会が開催され、
アジア競技大会出場選手と合わせ総勢11人のOB・OGアスリートが一堂に会しました。

陸上競技部
3世代対談

ダンス部
「三国志」の舞台裏

イーグルス
スポーツスクール



左から
高橋繁浩（競泳）、青戸慎司（陸上競技短距離）、松村亜矢子（アーティスティックスイミング）、市川華菜（陸上競技短距離）、
佐藤圭太（パラ陸上競技短距離）、山本聖途（陸上競技棒高跳び）、湯上剛輝（陸上競技円盤投）、西小野皓大（競泳）、
田村朋也（陸上競技短距離）、川端魁人（陸上競技短距離）、馬場幸子（ソフトボール）（敬称略）

スポーツ情報局 ライト Chukyo Univ.

編集後記

ライトのHPはこちら

本誌を読んでくださる方々に、挑戦し続ける学生の活躍・魅力を伝えたいという想いを込めて制作しました。学生である今の私たちだからこそ書ける、等身大の言葉を届けます。



髙橋陽色（たかはし ひいろ）
（文学部4年）

今号から作成に携わることになりました。はじめてのミーティングや取材で緊張や不安もありましたが、楽しく充実した業務になりました。中京大学スポーツの魅力を発信できるよう頑張ります！



江﨑絢美（えさきあやみ）
（総合政策学部2年）

今回も取材のため、東京や長野などさまざまな場所に赴いて、選手にお話を伺ってきました。そうした大会の臨場感であったり、より詳しいお話が聞けたりと、よい記事が出来上がったと思います！



青木晟（あおきじょう）
（総合政策学部4年）



奥村咲季（おくむらさき）
（総合政策学部2年）

「両親の方が自分より記事を楽しみにしているんです」という選手の言葉が印象に残っています。記事を待っている方々の存在を実感し、良い記事を書きたいという思いが強まりました。



古川さやか（ふるかわ）
（スポーツ科学部2年）

今回、初めてBeyondの制作に携わり、驚きとワクワクの連続でした!!取材から執筆まで2ページも担当させていただき、とても楽しかったです！



垣添琴葉（かきぞえことは）
（国際学部4年）

今号では多くの取材を行うなかで、スポーツが私たちにもたらす力を改めて実感しました。私が取材中に感じた選手たちの魅力が、紙面を通して皆さんにも伝わっていたら嬉しいです！

取材中、ダンス部の皆さんが作品に込めた思いや練習の裏側を生き生きと語ってくださったことが印象に残っています。全国優勝の裏にある努力を、ぜひ記事から感じていただきたいです。



大場雄斗（おおばゆうと）
（総合政策学部3年）

附属校の取材を通して、高校生活と競技を両立しながら、目標に向かって努力を重ねる姿が印象に残りました。取材で感じた競技への熱意や魅力が、読者の皆さんに伝われば嬉しいです。



土屋里奈（つちやりな）
（文学部2年）

Beyondがなければ交差することが無かった、自分とはまるで生き方が違う人たちと取材を通してお話することが出来るのがとても楽しいです！自分も頑張ろうという気持ちになれます。



糟谷美羽（かすやみう）
（文学部4年）

今号もたくさんの企画に携わらせていただきました。取材が荒天なことが多く、異常な暑さに見舞われたり、大雨と突風で傘を壊したりと、大変なこともありましたが、選手の活躍を目の当たりにすれば疲れも吹き飛びました。雨にも風にも夏の暑さにも負けない、丈夫な記者になりたいものです。



宇都亜衣菜（うとあいな）
（文学部3年）

チューグルを探せ！

「Goodチューグル」がページの中に隠れています。

チューグルを見つけてアンケートにお答えいただいた方の中から、**正解した5名様**に抽選でチューグルグッズをプレゼントします！

こちらからご回答いただけます

回答締切:2027年1月3日（日）

同じポーズの「Goodチューグル」を見つけてね！



CHUKYOイーグルマスコットキャラクター「チューグル」

中京大学スポーツ振興部のSNSもチェック！

Instagram　Facebook　X　Youtube

Beyondはデジタルブックでもご覧いただけます ⇧こちらから

中京大学 CHUKYO UNIVERSITY

発行／中京大学
〒466-8666 名古屋市昭和区八事本町101-2
【広報課】TEL 052-835-7135
【スポーツ振興部】TEL 0565-46-6935

FSC www.fsc.org ミックス 紙｜責任ある森林管理を支えています FSC® C019709

第20回 アジア・アジアパラ

藤井萌夏 選手（スポーツ科学部4年）

9月26～28日に行われたアーティスティックスイミングでは藤井萌夏選手が日本代表チーム「マーメイドジャパン」の一員として活躍しました。アクロバティックルーティン、テクニカルルーティン、フリールーティンの3種目の合計得点は821・7404点で、見事6大会連続となる銀メダルに輝きました。この結果を受けて、藤井選手は「2位という結果が分かったときは、安心と嬉しい気持ちでいっぱいでした。やっぱりいろんな人が応援してくださっている中で、結果で恩返しできたことが、本当に良かったなと思いました」とメダル獲得の喜びを語ってくれました。



藤井選手（写真最前列右側）©共同通信社

今大会のチームとしての目標に中国に少しでも近づくことを掲げ、毎日練習に励んでいたマーメイドジャパン。惜しくも結果として中国には敵いませんでしたが、「審判の方からの評価では『中国に近づいてきている、勢いを感じる』と、良い評価をいただけたので、それが率直にとても嬉しかったです」と藤井選手は話します。

今後の目標は、「ロサンゼルスオリンピックで日本代表として泳いで、メダルを獲得すること」。藤井選手は、来年の世界選手権にも出場予定です。さらなる活躍に期待が高まります。





湯上剛輝（ゆがみまさてる） 選手（2015年度スポーツ科学部卒）



9月24日、円盤投げに出場した湯上剛輝選手は、58メートル53で6位に入賞しました。アジア大会の開催地が、出身大学と所属企業の所在地ということもあり、「2018年に初めて出場したアジア大会と同じ順位になってしまった。日頃応援してくれる身近な方々の応援に応える意味でも、もっといい順位をとりたかった」と悔しそうな表情を浮かべます。しかし、今シーズンも4月に65メートル38の自己ベストをマークしており、「競技歴はベテランになってきたが、来年も再来年も更なる記録を出し続けたい」と、競技への熱い思いを語りました。

福永凌太（ふくながりょうた） 選手（2020年度スポーツ科学部卒）

10月18～24日まで第5回アジアパラ競技大会が開催され、福永凌太選手（2020年度スポーツ科学部卒）が陸上競技に出場しました。福永選手は走り幅跳び（T13）で金メダル、男子100メートルと男子400メートル（T13）で銀メダルを獲得し、有終の美で大会を終えました。これからの活躍も期待されます。

アジア大会 ボランティア

アジア・アジアパラ競技大会では、約4万人のボランティアが参加。今回ボランティアとして大会運営をサポートした中京大学ライトスポーツ情報局所属の古川さやかさん（スポーツ科学部・2年）にインタビューを行いました。

「元々スポーツに興味があり、大きい大会が愛知・名古屋でやると知ってぜひ関わってみたいと思いました」。スポーツをプレイすることも観戦することも好きだという古川さん。ボランティアに参加を申し込んだのは、開催の1年以上前でした。

古川さんは、卓球と射撃のベニューマネジメント（会場運営サポート）としてボランティアに参加しました。ベニューマネジメントの主な仕事は、役割ごとに立入制限エリアが分かれている会場内で、誤入場が起きないよう入退場を管理することです。

ボランティアとして活動するうえで意識していたことは「たくさん人と話すことです。こんなにいろんな年代の方と関われる機会はなかなかないので、一期一会だと思っていっぱい話しました」と教えてくれました。

今回の経験を通じて古川さんの心境にも変化があったといいます。「いろいろなことにもっとチャレンジしたいです！今回のボランティアは想像以上に得られたものが多く、やってよかったと思えました。今のライトスポーツ情報局の活動もそうですが、気になったらまずは飛び込んでみることをもっと頑張っていきたいです。さまざまな経験を積みたいです！」

選手や観客に加えて、運営を担う多くのボランティアの方々が今大会を支えていました。古川さんをはじめとしたボランティアの方々にとって、この経験は何にも代えがたいものになったでしょう。



古川さやか さん
（スポーツ科学部2年）
（ライト スポーツ情報局所属）

文・写真・構成：学生広報スタッフ「ライト スポーツ情報局」垣添琴葉、宇都亜衣菜、河澄祥歩、青木晟、三上祐輝



活躍した選手たち

西小野皓大（にしおのこうだい）選手

（2025年度スポーツ科学部卒）

西小野皓大選手は9月25日、競泳男子200メートル背泳ぎに出場し、1分56秒42で金メダルを獲得しました。予選を全体5位で通過して臨んだ決勝。150メートル地点までは3位につけるも最後の50メートルで前へ出ると、見事な逆転劇で頂点に立ちました。レース直後には大きく拳を振りおろして水面をたたくガッツポーズが飛び出しました。その姿からは、プラン通りのレース展開を実現できた喜びと達成感があふれていました。

9月20日に行われた男子100メートル背泳ぎでは自己ベストを更新しながらも、惜しくも表彰台には届かず4位入賞。悔しさを残す結果となりました。一方で、自己ベストを出せたことで自身の状態の良さも感じていました。「応援に来ている沢山の人のためにも、ここで諦めてはいけない」そう自信をもって臨んだ200メートル背泳ぎで、見事にリベンジを果たしました。

次に見据えるのは、2028年のロサンゼルスオリンピックでの活躍。来月には中国で開催される世界選手権の出場も控えています。「世界の舞台でしっかり決勝に進めるように」とさらなる飛躍を目指しています。



©共同通信社



©共同通信社

競技大会

本ページで紹介しきれなかった、
アジア・アジアパラ競技大会に出場した
本学選手の結果は、こちらからご覧ください！

アジア大会 聖火リレー

アジア大会聖火リレーで鍵山優真選手・木村葵来選手がPRランナーを務める



鍵山優真選手

9月19日に開幕する第20回アジア競技大会（2026／愛知・名古屋）の聖火リレーが、8月22日に名古屋市内でスタートし、9月18日まで県内各地で実施されました。

8月22日は名古屋城・二之丸広場で採火を行い、リレーの第一走者としてミラノ・コルティナ冬季五輪・フィギュアスケートで2つの銀メダルを獲得した鍵山優真選手（スポーツ科学部4年）が走りました。その後、中区エリアでは同五輪・スノーボード男子ビッグエアで金メダルを獲得した木村葵来選手（同3年）も走者を務めました。両選手とも沿道からの多くの声援に柔らかな笑顔で応え、PRランナーとして大会の魅力をアピールしながら聖火をリレーしました。

本学の在学生や卒業生など多くの関係者が出場するアジア大会の開幕が近づいていることを実感させるイベントとなり、当大会への関心を深める貴重な機会となりました。

木村葵来選手（写真右）



現在の短距離界のトレンド、逆に昔のウェアやトレーニング方法でお互いに聞きたいことはありますか？

小島　当時のスパイクはどんな感じか聞いてみたくて。自分はずっと厚底…。

青戸　え、厚底しか履いたことはない？

小島　基本ずっと厚底ですね。だから薄いという感覚が分からなくて。

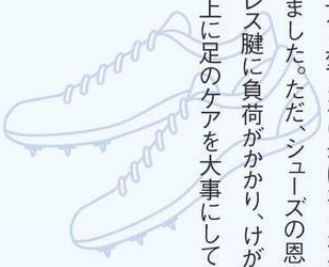
川端　最初から厚底で練習が積めるのは、逆に若い世代の良さではありますよね。変な感覚なく走ることができる。

青戸　僕の頃は、トラックも柔らかかった。柔らかいから滑るんですね。そこから全天候型のトラックが出てきて凄い!!と感動しました。スパイクも軽さ重視で、ぐにゃぐにゃ。自己ベストが10秒28なので、今の硬いトラックと硬いスパイクで走れていたら、自分は絶対9秒台を出せたと思います。

川端さんはちょうどシューズの過渡期ですね。

川端　そうですね。(薄底も厚底も)どちらもわかります。やはり感覚が変わりますね。使う筋肉も変わってくるし、正解はないから試行錯誤しなくてはいけなかったです。

青戸　厚底は、カーボンファイバーを曲げたエネルギーの反発を使う走り方なので、昔みたいに地面をたたくような走りではなくて、1テンポを押したり引いたりして走る。小島選手の世代は厚底ネイティブだから、すぐできるけど、川端選手は走り方を変えなければならなかったので、そこで苦労していました。ただ、シューズの恩恵は確かにありますが、アキレス腱に負荷がかかり、けがが増えているのも事実。昔以上に足のケアを大事にしてもらいたいですね。









青戸リクエスト　坊主について



青戸　坊主のこだわりに触れてください(笑)

伸ばさないんですか？

小島　そうですね。4年間ずっと坊主に。

高校の頃は強制でしたか？

小島　いや、自主的に坊主です。

青戸　何でなん？

小島　邪魔ですね。髪の毛が雨に濡れると重くなりそうだから。あとは、風の抵抗がないんじゃないか…とか。

手入れは楽ですか？

小島　楽です。自分でやるのでお金もかからないですし…。競技に集中できます。

青戸　そこが強みですよね。他人軸じゃなくて……とにかく、20歳前後って人のことが気になる頃なので。そこがぶれないところがいいですよね。自分軸でやっていて。

川端　ここの3人もそうですし、共通点かもしれないですね。他人軸じゃなくて自分軸じゃないとだめなんです。

フルバージョンはこちらから

文・写真・構成:学生広報スタッフ「ライト スポーツ情報局」糟谷美羽、宇都亜衣菜、三上祐輝



青戸慎司さん
陸上競技部副部長。
男子100m元日本記録保持者。
自己ベストは10秒28（100m）

小島譲さん
スポーツ科学部1年。
6月の西日本インカレでは、
400mで2位入賞。

川端魁人さん
陸上競技部コーチ。
東京五輪、パリ五輪でともに
4×400mリレーに出場。

陸上競技部3世代対談

多くのオリンピアンを輩出している中京大学陸上競技部。
今回は各世代を代表する3人にトークテーマを元に対談して頂きました！普段聞けないような話も盛りだくさんです。

長い歴史のある中京大陸上競技部。学生だった頃と比較して今の部に対しどのような思いがありますか？

青戸　自分が学生として入部してからちょうど今年で40年になります。昔から学生を縛ることなく、自由に練習できるカルチャーでしたが、それはコーチになってからも大事にしています。

川端　練習だけをしていた頃からコーチとなった今でも、選手がチャレンジできる環境が良さだと思います。特に地方の大学から多くのオリンピアンを輩出しており、挑戦できる環境はとても整っている。

小島　川端さんは僕と青戸さんのちょうど間の世代ですが、川端さんの頃も「昭和」な練習はありましたか？

川端　昭和かー（笑）今はネットで練習動画がたくさんありますが、それは氷山の一角でトップアスリート達は泥臭い練習を山ほどしている。そう思うと、泥臭い練習が減ったとも言えますね。科学的に効率の良い練習は増えたけど、情報の精査が重要です。

泥臭さをベースに、タイパ・コスパを意識した練習が重要ですね

青戸　タイパ・コスパは昔には無かった概念ですね（笑）自分が学生の頃は情報が少なくて、自分で試行錯誤することが求められていました。今の世代はある種ネットを通じて「答え」を知っている側面があると思います。だから試行錯誤する姿勢があわない。自分の可能性を引き出すために、「自分オリジナル」に挑戦してほしいですね。

小島　おっしゃる通りです。

川端　逆に今の学生から、コーチに求めることはある？

小島　ドリルメニューを詳しく教えてほしいです。自分で調べるより、結果を出されている方に聞いた方が確実だと思うので。

川端　普段の練習にもヒントはあると思うから、そこから学んでいくのも大切。自分は見守ってもらいつつ、良いアドバイスを（青戸さんに）求めていますね。

確認作業に近いですね

小島　僕はまだ大人の判断ができなくて…。けがをしそうでも走りたければ走ってしまう。コーチの言葉を聞いて大人になりたいです。

青戸　何事も経験。けがの見極めも、レースも一つとして同じものはないから、より高いレベルを目指すために、判断ができるようになるのは必要ですね。小島選手は高いレベルにたどり着ける選手だと思うので、ここを大切にしてほしいですね。

小島　頑張ります！

小学生の頃はどのような子どもでしたか？

青戸　足が速くて走ることが好きな子どもでした。50m7秒で走れたのですが、学校ではいつも2番で。1番だった彼に勝つためにクラブに入ってずっと練習をしていました。

川端　自分で言うのもあれですけど、優等生でしたね（笑）遊びに行くときもまず宿題をして、明日の準備をやってから出かけていました。今思うと大分しっかりしていたんじゃないかと思います。

小島　僕は、多分小学生がそのまま大学生になった感じですね（笑）

（一同、笑う）

青戸　宿題はやってた？

小島　夏休みの宿題も最後にやるタイプでした。ラスト一週間にまとめて…みたいな感じで。

友達とはどのようなことをして遊んでいましたか？

小島　基本は外で鬼ごっことか。家でゲームとかはほとんどなくて。

青戸　ゲームが主流な時代じゃなかった？

小島　そうですね。ニンテンドーDSがちょうど流行ってきたくらいでした。

FOCUS 中京ア

TRACK AND FIELD

SOFT BALL

男子ソフトボール部

進化するチーム力！ 選手主体で挑んだ全国の舞台





松浦稜太選手

9月5～7日、第61回全日本大学男子ソフトボール選手権大会が富山県で開催され、男子ソフトボール部が出場した。今年のチームのテーマは、監督不在のなかで選手主体のチームづくりを進めることだった。昨年と比べ、自分たちで考え、主体的にプレーしようとする姿勢に大きな変化が見られたという。

1回戦の国際武道大学との試合に引き続き、2回戦の岐阜聖徳学園大学でも快勝し、勢いに乗った。3回戦では昨年の準決勝でも対戦した同志社大学との試合が行われた。この試合では、主将の松浦稜太選手（現代社会学部4年）がサヨナラタイムリーヒットを放ち、4－3で中京大学が見事に勝利を収めた。最終日の準決勝では、日本体育大学と戦うも、6－9で悔しい結果となった。男子ソフトボール部は3位で今大会を終えた。

陸上競技部

バトンで繋ぐ躍進！ 日本学生陸上競技 対校選手権大会へ出場



（左から）木原万里花選手、三輪琉姫選手、前田紗希選手、中野知咲選手



（左から）小島譲選手、上治大琉選手、杉山大知選手、内藤悠選手

今シーズンは複数の大会で全国の強豪と渡り合い、輝かしい成績を収めた。そのハイライトとなったのが、9月5～7日に開催された日本学生陸上競技対校選手権大会だ。

女子4×100メートルリレーは、厳しい予選を勝ち抜き、決勝進出。45秒48で5位入賞を果たした。また、男子4×400メートルリレーは、6月の西日本インカレで中京大学記録を樹立した勢いそのままに、予選を1着で通過。決勝でも3分6秒50の好記録で5位入賞と健闘した結果となった。

記録と順位の両面で躍進を遂げた中京大学のリレーチーム。選手たちの今後の活躍にも目が離せない。

SWIMMING

水泳部

応援を力に変えて駆け抜けた、熱戦の4日間



三輪田理央選手（男子100mバタフライ）

9月3～6日の4日間、大阪府門真市・東和薬品RACTABドームで第102回日本学生選手権水泳競技大会競泳競技が開催された。水泳部は「男子総合準優勝、女子総合優勝」を目標に掲げ、この大会に臨んだ。本大会では、個人種目とリレー種目の両方の結果がチームの総合得点に反映される。私たちライトスポーツ情報局も大会最終日に会場へ足を運び、選手たちの熱い戦いを見届けた。

この日、特に盛り上がったのは、最終種目の4×200メートルフリーリレー。レース直前に円陣を組んで気合いを入れる様子や、応援席から声援を送る様子など、チームで一丸となって大会に向き合う姿勢が印象的だった。

最終結果は男子総合4位、女子総合3位と、惜しくも目標には届かなかったが、エントリーランキングは男女ともに5位と、予想よりも順位を上げて大会を締めくくることができた。今後の水泳部の活躍にも期待が高まる。

文・写真・構成：学生広報スタッフ「ライト スポーツ情報局」青木晟、伊藤圭汰、垣添琴葉、宇都亜衣菜、岡田美虹、河澄祥歩、髙橋陽色

SHORT TRACK

スケート部

ショートトラック・インカレで躍動！

10月17～18日、帝産アイススケートトレーニングセンター（長野県南佐久郡南牧村）で、第99回日本学生氷上競技選手権大会ショートトラック競技が開催され、中京大学からは5人の選手が出場した。

主将の垣波武蔵選手（スポーツ科学部4年）は男子3000㍍で、鬼田来人選手（同1年）は男子500㍍でそれぞれ優勝、また男子3000㍍リレーでは垣波選手・鬼田選手・夏目笑選手（同4年）・林大剛選手（同3年）が出場。大会新記録をたたき出し、勢いそのままに男子5000㍍リレーで優勝を飾った。

男子1000㍍では夏目選手が2位、鬼田選手が3位。男子1500㍍では林選手が3位、垣波選手が4位。女子では、仲野六花選手（同1年）が1000㍍で2位、1500㍍で5位とそれぞれ健闘した。

なかでも、5000㍍リレーについて垣波選手は「2番手以降のチームにアクシデントがあり、大差がつくレース展開となった。その中でも、中京大学4人でミスや転倒なくゴールまで繋いでいけたことは、日ごろから行ってきたリレーの練習を活かすことができたと思う」と振り返った。



（左から）林大剛選手、鬼田来人選手、仲野六花選手、垣波武蔵選手、夏目笑選手

S ON スリート

BASE BALL

硬式野球部

第75回全日本大学野球選手権記念大会へ出場

硬式野球部は6月9日、第75回全日本大学野球選手権記念大会（全日本）へ出場し、初戦（対東海大学九州キャンパス）に臨んだ。愛知大学野球連盟春季リーグを優勝で飾ったなかで、ベスト8を超えることを目標に戦った。

試合は、1回表の攻撃から鈴木湧陽選手（スポーツ科学部3年）の二塁打、金沢玲哉選手（同3年）のタイムリーヒットで先制。3回表には、春季リーグ戦で三冠王に輝いた狩俣藍生選手（同4年）がライトへ鋭いタイムリーツーベースヒットを放った。

中京大学の先発・伊藤幹太選手（同3年）は、3回を投げて2失点と粘りの投球を見せた。また、4回からは磯部祐吉選手（同3年）が昨年の全日本ぶりに東京ドームのマウンドに上がり、8回までを投げぬいたが、5回裏に勝ち越しタイムリーヒットを打たれ、これが決勝点となり、2-3で中京大学は敗戦となった。

チームの目標である「全日本で過去最高のベスト8を超える」ことは次回大会以降へ持ち越しとなったが、また全日本の舞台で躍動する姿を見せてくれるだろう。



伊藤幹太選手

創部70周年シーズンに春秋制覇！19年ぶり明治神宮大会出場

硬式野球部は10月18日、中京大学野球場で秋季リーグ最終節第二戦を愛知工業大学と行った。

この試合の先発を任されたのは寺下颯真選手（スポーツ科学部3年）。4番DHとしてもスタメンに名を連ね、二刀流としての活躍も大いに期待された。

試合はシーソーゲームの様相を見せたが、同点の5回裏、寺下選手がライトの頭上を越える勝ち越しホームランを放つ。寺下選手は7回裏にも追加点となる2点タイムリーツーベースヒットを放ち、投げては7回3失点、打っては1本塁打4打点と二刀流そのもの。まさにヒーロー独り占めの大活躍を見せた。8回からは磯部祐吉選手（同3年）が登板し、危なげなく試合をクローズ。最終的に8-3で中京大学が勝利を収めた。

この結果をもって、秋季リーグの優勝及び第22回東海地区・北陸・愛知三連盟王座決定戦（王座決定戦）への進出が決定。王座決定戦の決勝では、皇學館大学に対し15-2の大差で見事勝利。2007年以来19年ぶり9度目の優勝を果たし、11月19日より明治神宮球場で行われる全国大会に出場した硬式野球部。筑波大学相手に5-10で初戦敗退となったが、日本一に向けた戦いはまだまだ続く。



胴上げされる半田監督

Q ラクロスとは?

ラクロスは、棒の先に網のついたスティック(クロス)を使い、テニスボール大の硬質ゴム製のボールを、180センチ四方のゴールまで運んで得点を競う団体球技です。シュート・スピードが時には時速150kmを超えることから、「地上最速のスポーツ」と呼ばれることもあります。2028年に開催されるロサンゼルス五輪では正式種目に追加されており、これからさらに注目度が高まるスポーツとなっています。



伊藤(いとう)あずさ選手
(スポーツ科学部2年)

Q 女子ラクロス部の雰囲気は?

A 学年に関係なく仲がいいところと、でも練習になればしっかり先輩・後輩という関係ができてしっかり指摘し合えるところがチームのいいところだなと思っています!

Q ラクロスの魅力は?

A 大学から始める人がほとんどなので、これまでの経験は関係なく、にみんなのスタート地点が同じなので、大学から始めても東海代表や日本代表などを目指せるところが魅力です。



Q 今後の目標は?
目の前の結果にこだわり、1部リーグ昇格を必ず達成します!



Q これまでの運動歴は?

A 中学校ではバスケ部、高校ではサッカー部でした!

Q ラクロスを始めたきっかけは?

A 自分自身まず大学でラクロスを初めて知り、先輩後輩の関係がとても良かったことと、大学生から新しいことを始めたいなと思っていたので、その上でより上を目指せることに魅力を感じて始めました。



國吉愛美(くによしまなみ)選手
(スポーツ科学部3年)

スポーツ情報局 ライト Chukyo Univ.

がラクロスに挑戦!



Q これまでの運動歴は?

A 小学校6年生から高校3年生までバスケをやっていました!

Q ラクロスを始めたきっかけは?

A 何か新しいスポーツをやりたいなと思っていたときに、新歓とかでとても部活の雰囲気がよかったことと、みんなスタートが大学からなので自分の努力次第で上に行けるのが魅力的だったのでラクロスを始めました。部員の仲が良く、すごく居心地がいいので大好きです!

清水和華(しみずともか)選手
(女子ラクロス部主将 スポーツ科学部4年)



Q これまでの運動歴は?

A 中学校ではカヌー部で、高校ではバスケ部でした。

Q 女子ラクロス部の雰囲気は?

A 練習になると上下関係なく指摘するところは指摘しあうところや、試合のときも試合の流れが悪くなりそうな時でも声を掛け合っているため、いい雰囲気でプレーができているかなと思います。

柘植彩加(つげあやか)選手
(スポーツ科学部4年)

体験を通しての感想

今回、初めてラクロスを体験して、普段聞くことのないラクロス特有の用語をたくさん知ることができました。特にボールを落とさずにクロスを動かすことが難しく、思っていた以上に苦戦しました。しかし、練習を重ねて少しずつできるようになると、とても楽しく、達成感も感じられました。ラクロスは普段簡単に体験できるスポーツではないため、今回の体験を通して貴重な経験ができてよかったです。

高橋苺花(たかはしもか)
(文学部2年)







高橋陽色(たかはしひいろ)
(文学部4年)

純粋にすごくすごく楽しかったです!部員の皆さんが優しく教えてくださり、できた時は一緒に喜んでくださったことがとても嬉しかったです。「ラクロス」というスポーツについて聞いたことはあっても、どのようなプレーがあるのか、どういった攻め方・守り方をするのかなど、知らないことばかりでした。しかし、実際に体験をすることで、ラクロスの面白さや魅力を知ることが出来ました。また、初心者からでも始めることができるスポーツである点も魅力の一つだと感じました。



文・写真・構成:学生広報スタッフ「ライト スポーツ情報局」三上祐輝、髙橋陽色、高橋苺花

CHUKYO SPORTS
−Challenge & Connect−

アスリートの愛用品

プレースタイルに個性があるように、アスリートの愛用品にもその人らしさが出ます。
日用品からスポーツ用品まで、選手たちのこだわりアイテムとエピソードを紹介します。

cool

シャクティマット

心身を整える、毎日のルーティン

寺下さんは「シャクティマット」をピックアップ。このマットの上に寝転がり、体に圧をかけることで血流が促され、疲労回復や睡眠の質の向上につながるといいます。「前から気になっていて、それを知っていた同級生の野手たちが誕生日にプレゼントしてくれたんです!」と嬉しそうに語ってくれました。

全面に施されたトゲトゲの突起が特徴のこのマット。3段階あるグレードの中でも最も刺激の強いタイプを愛用しているそうで、「使い始めた頃は腕で体を支えたりしながら使っていました」と話します。それでも、「5分ぐらいすると慣れてきて、気持ちいいゾーンに入ってきます。寝ながらスマホを見たり、本を読んだりもできますよ」と、今ではすっかり慣れた様子。毎日のルーティンとなり、遠征にも欠かさず持っていくほどのお気に入りです。





硬式野球部　秋季リーグ MVP・ベストナイン（指名打者）
本塁打王・打点王
寺下颯真（てらした そうま）選手（スポーツ科学部3年）

buddy

トレーニングシューズ

日々のトレーニングを支える相棒

「自分の武器は足」と話す鈴木さんの愛用品は、大学2年から使い続けているトレーニングシューズです。使い始めたきっかけは、学生トレーナーからの「トレーニングするならこのシューズがいいよ」という一言。「それまで色々な靴を試しましたが、買ってからはもうこれしか使えなくなってしまいました」と、今では絶大な信頼を寄せています。ピンクの可愛らしいカラーも印象的で、硬めのソールが地面からの反発をしっかりと受け止め、力をダイレクトに伝えられる点がお気に入りだそうです。

大学日本代表の台湾遠征にも持参し、「このシューズに出会ってから、トレーニングの質やモチベーションが本当に変わったんです!」と、日々の厳しい練習を支える相棒への熱い思いを語ってくれました。







硬式野球部　侍ジャパン大学日本代表
秋季リーグベストナイン（二塁手）
鈴木湧陽（すずき ゆうひ）選手（スポーツ科学部3年）

EAGLES SPORTS SCHOOL
Presented by Toyota City and Chukyo Univ.

イーグルススポーツスクールを開催しました





豊田市と中京大学が連携して開催する「イーグルススポーツスクール」。多くの人がスポーツの楽しさを体験し身体を動かすことの魅力を知る機会として、体育会クラブの学生やスポーツ科学部のゼミが一年を通してさまざまなスポーツ教室を開催しています。今回取材した2つの教室を通して、学生たちは「純粋に一つ一つの動きを楽しむ姿や、走ることでも全力に取り組む意欲の高さにとても驚き、自分自身もやる気をもらうことができた」と話しました。



かけっこ教室





開催日 2026年7月5日(日)、7月12日(日)、7月25日(土)の全3回
場所 中京大学豊田キャンパス屋内走路棟、6号館屋内人工芝エリア
対象 小学生　講師 中京大学陸上競技部

かけっこ教室は、陸上競技部の学生たちから小学生へ全3回の教室を通して、速く走るための基礎基本のポイントを指導し、最終日に50m走を計測するといった内容で行われています。7月5日の教室では、子どもたちがのびのびと学べるよう、速く走るための3つのコツ「姿勢・腕振り・もも上げ」をテーマに、遊びを交えながら進みました。学生が実際に動きを見せながら分かりやすく伝えると、子どもたちは楽しみながら走り方のポイントを学び、教室の最後に50mを実際に走るシーンでは、「100m走りたい！」とキラキラとした表情でお願いする子どもたちの元気さに驚く学生の様子もありました。参加した保護者からは、「学生が講師だと学校の先生よりも年が近いこともあり、緊張せず参加できている感じがしてよかった」「普段入ることのできない大学の施設を見学することができ、良い機会だった」といった声を聞くことができました。

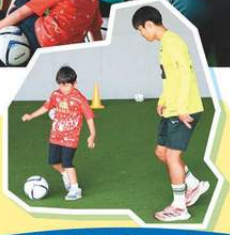
子どもたちの感想

- 教えてもらったことを体力テストで意識したい
- 来年の50m走で頑張りたい
- 今年の運動会で1位になりたい！

ちびっこサッカー教室

開催日 2026年7月11日(土)
場所 中京大学豊田キャンパス 6号館屋内人工芝グラウンド
対象 4～6歳(小学生未満のお子様)　講師 中京大学男子サッカー部







ちびっこサッカー教室は、サッカーが初めてでもボールに触れることを通して、足だけではなく体全体を使って動く楽しさを体験し、サッカーの基本動作を学ぶといった内容で行われています。当日は、子どもたちが緊張せず参加できるよう鬼ごっこから始まり、だんだんボールに触れる練習へと移りました。その後のシュート練習やミニゲームといった実践的な内容に取り組む中で、夢中になって楽しみながらボールを追いかける子どもたちの姿が印象的でした。講師として参加した男子サッカー部の学生は、「まずはとにかく教室の雰囲気に慣れて仲良くなることを目標に、いろんな声かけをすることを意識した」と話し、「緊張している子が多かったが、積極的にコミュニケーションを取り、いい雰囲気をつくることで楽しくサッカーを教えることができた」と振り返りました。上手くできた子どもに対して「上手！」「すごい！」と声をかけながらハイタッチをしたり、上手にできるコツを分かりやすくアドバイスしたりする場面も多く見られ、教室全体に笑顔が広がっていました。

子どもたちの感想

- たくさん試合できて楽しかった！
- サッカーをもっと頑張りたい！

文・写真・構成:学生広報スタッフ「ライト スポーツ情報局」古川さやか



ゼロからの作品づくり

全国優勝作品「三国志」の舞台裏

「三国志」を演じた2人が語る作品づくり

5月4日に開催された第37回全国ＪＤＡダンスコンクールで、ダンス部が一般の部優勝・第3位を見事に果たした。今回は、優勝作品「三国志」を演じた伊集院歌恋さん（スポーツ科学部4年）と徳田眞之介さん（スポーツ科学部4年）に、作品制作の裏側や創作ダンスの魅力、全国大会に懸けた思いを語ってもらった。

2人がダンスを始めたきっかけは、それぞれ異なる。徳田さんは、高校の部活動紹介で先輩が披露したバク転に憧れ、「自分もやってみたい」と思ったことがきっかけであった。一方、伊集院さんは、小学2年生の頃に参加したチアダンス教室で、ポンポンを持って踊るお姉さんたちの姿に憧れ、ダンスを始めた。その後、高校で創作ダンスと出会い、「自分たちで作品を一から作り上げる楽しさ」を知ったことから、大学でも続けることを決意したという。

創作ダンスの特徴は、決められた振付を踊るだけでなく、テーマ設定から音楽、振付、構成、衣装まで、自分たちの手で一つの作品を創り上げる点にある。作品ごとに伝えたいメッセージを考え、仲間と話し合いを重ねながら形にしていくため、伊集院さんは「ゼロからアート作品を完成させる感覚」と語る。また徳田さんは、言葉ではなく身体で感情や物語を表現できることが創作ダンスならではの魅力であり、「同じ作品でも観客によって受け取り方が変わる芸術性が面白い」と話した。

中でも、ダンス部の特徴は、学生主体で活動していることである。外部コーチによる指導は月に数回程度で、練習や作品制作、演出、照明、衣装、大道具の準備まで、ほとんどを学生自身が担っている。

また、創作ダンスは審査員の感性によって評価が分かれる競技である。そのため部員たちは、点数だけではなく、「誰か一人の心に届く作品を作ること」を大切にしている。作品制作では意見を交わしながら試行錯誤を重ね、その過程を大切にする姿勢が、ダンス部の強さにつながっている。

「三国志」を創り上げるまで細部へのこだわりが生む舞台

今回の優勝作品「三国志」は、振付だけでなく、大道具や照明など細部まで学生たちのこだわりが詰まった作品である。作品制作は振付を考えるだけではなく、実際に踊りながら演出や照明とのバランスを確認し、必要に応じて修正を重ねるなど、すべてを同時に進めていくそう。そのため、作品を作っている段階でもたくさんの葛藤があり、大変であったと振り返った。

今回の作品で特に苦労したことについて尋ねると、大道具として使用した机の制作を挙げてくれた。市販の机を加工し、脚の長さを調整したり、布をかぶせたり、滑り止めを付けたりと、安全性と演出効果を両立させるために細かな工夫を重ねた。また、照明についても作品の重要な演出の一つであり、「3秒に1回驚きがある作品」を意識しながら、照明の入り方や構成まで考えて制作していると話した。

作品の見どころについて、「緩急」と「ダンサー同士の関係性」を挙げてくれた。激しく踊る場面だけではなく、あえて静止する場面を取り入れることで作品全体にメリハリをつくり、観客が自然と見せ場を感じられるよう工夫しているそう。また、「三国志」の魏・呉・蜀それぞれの勢力の関係性を、ダンサー同士の動きや立ち位置で表現しているため、そのつながりにも注目してほしいと話していた。

最後に今後の目標について伺うと、「最後までやり切ること」と「後輩へ技術や考え方を伝えていくこと」を個人の目標として挙げてくれた。また、部としては全部員で出場する大会で、全員が納得できる作品を完成させることを目標に掲げている。「誰一人欠けることなく、一つひとつの舞台を乗り越えていきたい」という言葉からは、作品づくりを通して培われた仲間との絆や、創作ダンスへの熱い思いが伝わってきた。



文・構成：学生広報スタッフ「ライト スポーツ情報局」大場雄斗、高橋苺花　写真：ダンス部提供



全力キャンパスライフ

教職を目指しながら授業と部活をこなす大学生の一日に密着しました。
忙しいながらも、全力で取り組む姿に注目です。





バスケットボール部（女子）
加藤満里（かとうまり）さん
（スポーツ科学部4年）

部活がある日の1日のスケジュール



24:00 就寝
8:00 起床&準備
10:00〜11:10 朝練
11:10〜12:40 2限の授業を受ける
12:40〜13:30 大学のアスリート食堂で昼食
13:30〜15:00 3限の授業を受ける
15:00〜17:00 課題や資格の勉強
17:00〜19:15 部活動
19:15〜20:00 ウエイトトレーニング
21:00 帰宅
21:15 夕食
22:30〜24:00 資格の勉強や体のストレッチなど









Point

バスケットボールの練習は欠かせない!

忙しい中でもバスケットボールの自主練習は欠かせない習慣です。空き時間はシュート練習をするか、勉強するか、といった感じでした。





Point

空いた時間を有効活用!

スケジュールの兼ね合いで空いた時間ができてしまうときは、その時間に授業で出た課題や教職の勉強などを全てできるようにしています。



教職インターンがある1日のスケジュール



24:00 就寝
7:00 起床
8:30〜11:30 インターンシップに参加
11:45 帰宅
12:00 昼食
13:00〜17:00 資格の勉強や部活動の練習試合の動画を見る
17:00〜22:30 アルバイト
22:45 帰宅
23:00 夕食







Point

授業や部活動がない日に教職課程のインターンを入れる!

教職のインターンシップは朝から開催されることがほとんどでした。近くの小学校に配属されて授業を観察したり、放課の時間に児童と遊んだりしました。実際に現場の様子を見ることができて良かったなと思います。

文・写真・構成:学生広報スタッフ「ライト スポーツ情報局」糟谷美羽、垣添琴葉、青木晟、江﨑絢美、三上祐輝

中京大学 子どもスポーツフェスタ

2026年11月8日(日)

子どもスポーツフェスタの様子はこちらから

11月8日、中京大学豊田キャンパスで「中京大学子どもスポーツフェスタ」が開催されました。当日は1,200組・4,200人の方々にご来場いただき、さまざまなスポーツやイベントを楽しんでいただきました。



こども柔道教室

柔道部
福島煌陽(ふくしまてるや)さん

礼と受け身、実際に選手を投げてもらうところまでを体験してもらいました。柔道をあまり知らない子どもも、素直に楽しんでくれてよかったです！





ホッケー体験

陸上ホッケー部(女子)
穴井香湖(あないかこ)さん

ホッケーはまだあまり知られていない競技ですが、初めて体験する子どもたちが笑顔になってくれて嬉しかったです！

子どもの感想
- 初めてホッケーをやったけど楽しかった！
- 保育園にもホッケーのおもちゃがほしくなった！



体操体験

体操競技部
青谷武造(あおたにたけぞう)さん

貴重なトランポリンの体験や平均台、マット運動などを通して、できなかったことができるようになる達成感を体験してもらうことができました！





フェンシング体験

フェンシング部
安達悠(あだちはるか)さん

初めてフェンシングに挑戦する方が多く、最初は緊張した様子も見られましたが、体験が始まると親子や兄弟同士で対決するなど、楽しみながら参加していただけました！

子どもの感想
- 剣が重くて長くて、持ちにくかった
- 難しかったけど、楽しかった！



アメフト体験

アメリカンフットボール部
森田幸樹(もりたこうき)さん・蔵本優斗(くらもとゆうと)さん

子どもたちは楽しみに来てくれているので、期待を裏切らないようなふるまいを心がけました！子どもたちは全力で楽しんでくれたので、自分たちも全力で楽しみました！

子どもの感想
- 楽しかったからまたやりたい！
- 選手のみんなの足が速かった！



BLS体験&ミニゲーム&フォトスポット

小林凛宮(こばやしりく)さん

海の生き物に関するブースと、一次救命措置(BLS)の体験会、フォトスポットを開催しました！特にBLSは知っていて損はない知識なので、子どもたちの将来に役立ってほしいです！





フライングディスク体験

アルティメット部
前池烈斗(まえいけれっと)さん

フリスビーの持ち方を変えるだけで飛ぶようになるのが魅力です。はじめてフリスビーに触れるお子さんや親御さんも一緒に楽しんでもらえてよかったです。

子どもの感想
- 久しぶりにやってみて難しかったけど楽しかった！



キッズチア教室

チアリーディング部
石田(いしだ)ひなのさん

ダンス・スタンツを通してチアの魅力を知ってもらいました。みんなが同じように楽しんで、元気・勇気・笑顔が届けられるようにまず自分たちが楽しむことを大切にしました！

当日は少し肌寒い気候でしたが、お昼頃には晴天となり、半袖で元気いっぱいに楽しむ子どもたちや選手の姿が見られました。
昨年は雨天だったこともあり、保護者の方々からは「今年もリベンジで参加しました！」という声を多くいただきました。
会場では、サッカーや野球など普段から親しみのあるスポーツをはじめ、ホッケーやフェンシング、ラクロスなど、普段なかなか体験する機会の少ない競技まで、さまざまなスポーツを体験していただきました。子どもたちが新しい競技との出会いを楽しみながら、積極的に挑戦する姿が多く見られ、会場は終始活気にあふれていました。

文・写真・構成:学生広報スタッフ「ライト スポーツ情報局」古川さやか、青木晟、髙橋陽色、糟谷美羽、宇都亜衣菜、荻野朔矢、江﨑絢美、奥村咲季、林結愛

附属高校の最新ニュースをお届け!

中京大中京高校News

News

チアリーディング部 中部地区4冠達成



中京大中京高校チアリーディング部が第31回中部チアリーディング選手権大会で快挙を成し遂げた。DIVISION1高等学校ユースの部に出場したAチームと、DIVISION2高等学校ユースの部に出場したBチームが、それぞれ規定演技と自由演技で優勝。両チーム合わせて4つのタイトルを獲得し、同校初となる中部地区4冠を達成した。Aチームは規定演技得点で出場した高校全チームの中でトップとなった一方、規定演技と自由演技の合計得点ではJAPAN CUP2026チアリーディング日本選手権大会(以下、JAPAN CUP)決勝ステージへの出場権獲得にわずかに届かなかった。JAPAN CUPでは敗者復活戦から、決勝ステージ進出を目指した。

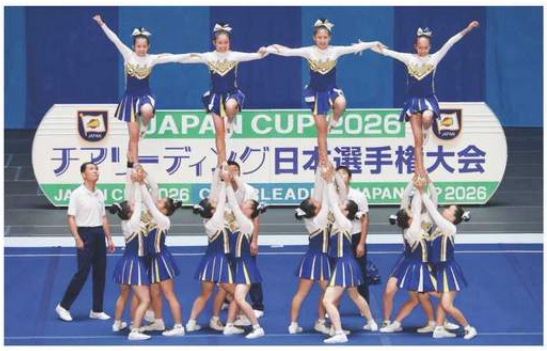
Aチームのキャプテンを務める今谷彩和さん(3年)は「優勝できたことはよかったが悔しい気持ちが大きく不完全燃焼」と大会を振り返った。

Aチームの強みは、動きの一つ一つにこだわったダンスと、「学年関係なく言い合える」という雰囲気の良さだ。大会を目前に控えても、良い緊張感を保ちながら明るい雰囲気で練習に励んでいる。

今谷さんはJAPAN CUPへの意気込みについて「敗者復活戦では自分たちのできることをやり切り、絶対に決勝ステージに進んで優勝する」と力強く語った。

一方、DIVISION2高等学校ユースの部に出場したBチームのキャプテンを務める小原美月さん(3年)は、「一人メンバーが欠け、構成が1からになるなどアクシデントもあったが、ミスなく全員が笑顔で終われてよかった」と中部大会を振り返った。予期せぬ変更がありながらも、メンバー全員で演技を完成させ、4冠の達成につなげた。

Aチームは8月27日から開催されたJAPAN CUPに出場。大会1日目に行われた敗者復活戦を勝ち抜き、決勝ステージへの進出を決めた。翌28日に行われた決勝ステージでは高校ユース部門で見事優勝を果たした。今谷さんは大会を振り返り、「支えてくださった周囲の方々のおかげで優勝することができた。一緒に頑張ってきた仲間との演技や、表彰式での景色は最高の思い出になった」と喜びを語った。



News

史上最年少V 加藤金次郎選手



©共同通信社

史上最年少となる15歳139日でプロゴルファーへの転向を宣言した加藤金次郎選手。その後、iGolf Shaper Challenge in 筑紫ヶ丘2026でプロ初優勝を果たし、16歳44日でのACNツアー史上最年少優勝記録を樹立した。

加藤選手は優勝直後の心境について「今年の目標だったのでホッとした気持ちが大きい」と振り返った。一方で〝史上最年少〟という記録については「プロになった以上年齢は特に意識していないが、結果的に記録を更新できたというのは大きな自信になった」と話した。

加藤選手は6歳の頃、お父さんの練習について行ったことをきっかけにゴルフに打ち込むようになった。現在、練習で意識していることについて尋ねると「量はもちろんだが、特に質を大切にしている。常に試合を意識しながら、『ただやるだけ』にならないように取り組んでいる」と、日頃から心掛けていることを明かした。また、自身の強みについては、「ショットの精度だと思う」と話す一方で、「世界で活躍するためには、まだまだ足りない部分がある」とさらなる成長への意欲をのぞかせた。レギュラーツアーでコンスタントに成績を残し、最終的には永久シードの獲得を目標に掲げる加藤選手。今後のさらなる活躍から目が離せない。

文・構成:学生広報スタッフ「ライト スポーツ情報局」土屋里奈、三上祐輝　写真:附属高校提供

Aim High Chukyo

アメリカンフットボール部EAGLES大橋誠（おおはしまこと）ヘッドコーチ



選手主体の指導で、目指すは東海地区から日本一の大学へ

2024年よりアメリカンフットボール部EAGLESのヘッドコーチを務める大橋誠氏。自身もXリーグで活躍し、オービックシーガルズを日本選手権4連覇へ導いた名将だ。近年EAGLESからはXリーグへ進む選手も多く輩出されている。

アメフトを始めたのは、高校生の時。入学式後の勧誘の熱の強さが段違いだったことが決め手だった。しかし入部後、修行のような日々が待っていた。同期が少なかったため、仲間を裏切れないという責任感を抱きながらプレーをしており、楽しさは感じなかったという。しかし、浪人していた際先輩に誘われて見た大学アメフトの試合で、高校とのレベルの違いに圧倒される。そして、先輩がいた早稲田大学へ入学し、大学でもアメフトを続けることを決めた。

その後リクルートシーガルズ（現オービックシーガルズ）に入団し、社会人になっても競技を続けた。ここで転機となったのは、恩師であるハワイ人のヘッドコーチの存在だ。アメフトを鍛錬の場だと捉えていた大橋氏にとって、〝ｈａｖｅｆｕｎ〟が口癖で常に何事も楽しみなさいというコーチの言葉は衝撃であったという。ベンチャーマインドで、何事にも挑戦していくカルチャー（チームの雰囲気）が作用し、弱小だったチームはライスボウルで勝利するまでに大きくなった。

1996年シーズンをもって競技を引退すると、97年にシーガルズのディフェンスコーチ、2000年に同ヘッドコーチに就任する。ハワイ人のヘッドコーチに後任を頼まれていたのがきっかけであった。しかし、同じ相手に同じ負け方をすることが続くなど、壁が立ちはだかる。チームを改善するために考えたのは指導のあり方であった。「恩師は常にポジティブかつリーダーシップがあり、選手をけん引することで勝利へ導いていくタイプだった。自分もそれを踏襲しようとしたが、試行錯誤の末に自分は先頭に立って引っ張るタイプではないと気づき、選手全員が参加意識をもてるチームにしたいと思った」たどり着いた指導法が上手くはまり、2010年からシーガルズは脅威の4連覇を遂げた。

現在はEAGLESでヘッドコーチを務めているが、学生を指導するのは今回が初めて。特に、ｔｅａｃｈｉｎｇ（技術・戦術を指導すること）とｃｏａｃｈｉｎｇ（選手がもっている能力や答えに気づいてもらうこと）のバランスを考えた指導が難しいという。選手のモチベーションを信じ、やる気を思い出させること。そして、戦術面でも精神面でも型にはめず、自身のこだわりを押し付けすぎないこと。この二つを大切にしながら、日々指導を続けている。明るくポジティブなEAGLESのカルチャーはそのまま、選手の特性を活かし最大出力を引き出す。選手を主軸に考え、目指すは選手が目標に掲げた大学日本一に連れていくことだ。

最後に、Xリーグに選手を輩出していることについて秘訣を尋ねると、「秘訣なんてものはない」と笑って答えてくれた。「大学4年間でどんどん上達した選手がそれきりでアメフトから離れてしまうのはもったいない。自分が提示することで、そういう選択肢があると興味をもってくれれば嬉しい」常に選手を第一に考え、一人ひとりの可能性を引き出す指導が、EAGLESをさらなる飛躍へと導いていくだろう。

profile

大橋誠ヘッドコーチ

1965年6月9日生まれ。アメフト部EAGLESのヘッドコーチを務める。今シーズン東海リーグ3連覇を達成し、見事全日本大学アメリカンフットボール選手権への出場を果たした。



文・構成：学生広報スタッフ「ライト スポーツ情報局」宇都亜衣菜　写真：本人提供